

薔薇十字叢書
しん たかどの
蜃の楼

著：和智正喜
Founder：京極夏彦



富士見L文庫

◎ ↓ 目次 ↑ ◎

第一章 【基】 6

第二章 【憧】 54

第三章 【展】 126

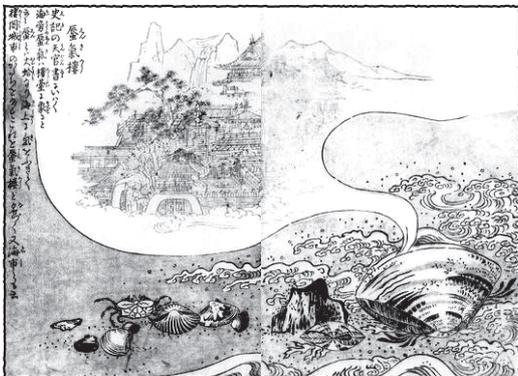
第四章 【欠】 213

あとがき 284



○ 蜃

—— 寺島良安 『和漢三才図会』



○ 蜃気楼

—— 史記の天官書にいはいく
海旁蜃気は楼台に象ると云々
蜃とは大蛤なり
海上に気をふきて
楼閣城市のかたちをなす
これを蜃気楼と名づく
又海市とも云

—— 鳥山石燕 『今昔百鬼拾遺』

第一章【基】

ブウン。
ブブウン。



一九五二年。
昭和二十七年。
——七月半ば。

世間の話題は、つい先日開幕したヘルシンキオリンピックに独占されていた。昭和十一年、一九三六年のベルリンオリンピック以来、実に十六年ぶりとなる、日本代表による夏季オリンピックの参加がその焦点だった。



暑い。
暑い。
うだるような暑さだ。

関せきぐち口ぐち裏うらは額の汗を拭ぬぐったが、ハンカチはもうぐっしり濡ぬれていて、不快感が増しただけだった。

——知らない街を歩くのは嫌いだ。
激しく消耗する。

押上おしあがり——知らない街だ。

この街とは、これまで縁がなかった。
そして。

そもそも、誰かと肩を並べて歩くのも苦手だ。置いて行かれてはまずいと、自然と早足になる。それもまた消耗の原因だ。

関口には今、ふたりの同行者がいた。

ひとりには木場修太郎。東京警視庁捜査一課の刑事だ。仕事柄——というのもおかしな話だが、開襟シャツのボタンがはち切れそうな分厚い胸板が目立つ、大木がのしのしと歩いているような男だ。

「こうして汗だくで歩いていると、南方戦線の地獄の進軍を思い出しますな、関口隊長」
「やめてくれよ、旦那」

その軽口に関口が顔をしかめると、木場は笑って背中を叩いてきた。溜まった汗がシャツに張りついて、ぴしゃりと音を立てる。

そのつき合いは戦中まで遡る。木場は関口が小隊長として配属された部隊の軍曹、職業軍人の下士官だった。大卒ということだけで士官になった関口のような立場の者は、なにかと辛く当たられるのが相場だったが、木場は優しかった。理由はわからない。そして、ともに南方戦線では苦勞をした。多くの被害が出た中で、なんとか再び日本の地を踏めたのも、木場の助けがあればこそだった。

つい最近も、雑司ヶ谷で発生した、嬰兒連続失踪事件では世話に——世話になった、という言い方が正しいのかどうかかわからないが——。

「——やはり世話にはなったのかな」

思わず関口の口をついて出た言葉に、木場は「あん？」と目を見開いた。

「もうすぐ見えてきますよ」

関口にその声をかけてきたのは、もうひとりの同行者、桜木要だった。既に五十を超えていたが、小柄な関口と比べると頭ひとつ背が高く、すらっとした、なかなかの美男子だ。関口の友人である榎木津ほどではないが、彫りの深い顔立ちには、日本人離れしている。

桜木は関口の担当編集者であり、ここところ、世話になっている出版社、幻叢社の社長でもあった。

処女作『嗤フ教師』で小説家として世に出て以来、関口は稀譚舎の「近代文藝」誌に寄稿するのが常だった。そんな彼が他の出版社で仕事をするようになったのは、桜木の熱意に拠るところが大きい。

『お会いできて光栄です。『嗤フ教師』以来、関口先生の作品には心、奪われておりました。『E. B. H. の肖像』も『イデオロギキの馬』も——』

会うなり、そう熱く語った桜木の顔が今でも鮮明に記憶に残っている。自著を褒められることに慣れていない、否、それ以前に、感想を語られること自体が苦痛な関口にしては珍しく、桜木の讃辞の言葉は心地よい音楽のように耳に響いた。

そして、気づけば、それまでは縁のなかった長編小説を書き下ろすことになっていた。

桜木のその申し出を了承しただけでも、関口には信じられないことだったが、それ以上に驚くべきことは、半年ほどの期間で、この春、その長編を脱稿してしまったことである。

——『蜃の楼』。

その小説こそが、関口の運命を大きく狂わせた。少なくとも、今、こうして木場、桜木とともに、炎天下、この押上という知らない街を歩く原因となった一冊だったのだが——。

「あの、桜木さん。なにが——」

見えてくるのですか？

そう問いかけようとした関口だったが、それを遮るような、

「問題は『S』だ」

木場の呟きに、関口は寒気を覚えて言葉を呑み込んだ。

——『S』。

そうだ、問題は「S」なのだ。

ここところ、東京のあちこちで頻発している神隠し事件。その犯人と目される男。

「だけど、木場の旦那——本当に僕が——僕の小説が、その神隠し事件と関係あるのかい？」

関口の質問に、木場は「うーん」と唸って、敵つゝ顎をぼりぼりと掻いた。

「それがわかんねえから、隊長にお出まし頂いた次第で。——あんたのそうは売れてねえ小説が、神隠し事件の現場や、行方不明者が暮らしてた部屋に共通して残されてたんだ。

『安宅家の人々』あたりなら、たまたま、偶然ってことにもなるだろうが——隊長の小説じゃなあ」

「確かに、我が社のせいで、関口先生の新作はささやかな部数であることは認めます」

吉屋信子のビッグヒットした新聞小説を引き合いに出した木場に、桜木は表情も変えずに答えた。

両側に小さな家が立ち並ぶ道を進んで、関口たちは四つ角に行き当たった。

「関口先生、あれですよ。あれ」

「——『S』ですか？」

「いや、そうではなく」桜木は苦笑いした。「先ほどからお話ししていた。関口先生、近くではご覧になったことがないと仰ってたでしょう？」

「はあ？——ああ、これが」

角を曲がった途端、それはまるで魔法のように姿を現した。

付近の背の低い建物を圧倒するようにそびえ立つのは、灰色の巨塔だった。

「——これは大きい。これなら——」

東京のどこにいても目に入るだろう。

「なにしろ、六三四メートルですからね」と、桜木が誇らしげに言う。しかし。

これほど大きなものが、どうして今まで目に入らなかったのだろうか。

（——いや）

それはそう不思議なことではない。

自分には、見ることはできても、視る、ことなど、できはしないのだ。本来認識すべき事柄を、頼りない眼が、そしてもっと覚束ない脳が、容易くやり過してしまうのだ。

それはこの前の事件で、嫌というほど痛感したばかりではなかったか——。

「しかしまあ、よくもこんなもの造ったよなあ」

木場はほとんど顔を真上に向けていた。その様子が間抜けに見えて、関口は微かに笑った。そして、自分もあらためて、頭を思いきり後ろに反らし、その天を突く高い塔を見上げた。

——東京スカイツリーを。

関口が木場、桜木とともに押上を彷徨う、その数時間前のこと。

◇

中野に眩暈坂という場所がある。

それが正式な地名なのかどうか、関口は知らない。両脇を墓所に挟まれたその坂は特殊な勾配のせいなのか、途中まで上ったところで、誰しも——特に関口のような外界からの影響を受けやすい男は。

——ふらっと。

平衡感覚に異常を来して、眩暈を覚える。だから、眩暈坂。

その坂の上に、京極堂きまじくどう、という古書肆こしょしがある。その主こそが、関口の旧制高校時代からの友人、京極堂——それは店名由来の通り名で、本名を中禅寺秋彦ちゆうぜんじあきひこという。古書店の主だけでなく、近くの武蔵晴明社の神主であり、そして憑物落つづもろとしてもする、

——陰陽師おんみょうしでもあった。

関口が店先を覗くと、珍しく、京極堂の細君、中禅寺千鶴子ちんぜんじちずこがいた。西洋風の顔立ちのなかなかの美人だ。

「あら、関口さん」

千鶴子から京極堂なら母屋にいと教えてもらおう。言われた通り、隣接している住居に回ると、京極堂は座敷で読書に耽ふけっていた。座敷とはいっても、書斎から溢あふれた書籍が山と積まれ、畳の半分は隠れてしまっている。

「久しぶりだな——いや、そうでもないか」

京極堂はいつものひどい仏頂面のまま、読んでいる書物から顔も上げずに関口を迎え入れた。そんな態度には昔から慣れている関口は、「邪魔するよ」と、近くから座布団を引

っ張ってきて、向かいに勝手に腰を下ろした。

京極堂は黙って本を読み続けている。

「——京極堂」

散々迷った挙げ句、関口はやっと口を開いた。

「君は『スカイツリー』というのを知っているかい？」

「スカイツリー？」

関口の呼びかけに、京極堂はようやく顔を上げた。

「いや、聞き覚えがないな——天空の木、か」

そう間を置かず、京極堂らしくない返答があった。

「その、なんというか——見上げるほど高い塔で——」

説明しようと思ったが、うまく言葉が出てこない。

「凌雲閣りょううんかく——浅草十二階あさくさじふにかいみたいなのかね？」

京極堂が口にしたのは、明治二十三年、一八九〇年に浅草に造られた、十二階建ての「高層建築」のことだった。明治中期の「望楼ブーム」に乗って建築されて当初は話題となり、客を集めたものの、すぐに飽きられて客足も遠のいた。とどめを刺したのが大正十二年、一九二三年の関東大震災である。建物は上部の倒壊に留とどまったが、弱体化していた経営陣

に再建の余裕はなく、そのままとり壊しが決まった悲運の「塔」である。

「凌雲閣なら実物は見たことはないが写真では知ってる——いや、それとは比較にならない。何百メートルもあるんだ」

「エンパイア・ステート・ビルディングみたいなものかい。あれは確か、四百メートル近い高さがあったはずだが」

「あつ、ああ——」

関口はエンパイア・ステート・ビルディングも写真でしか見たことがない。だが、それでも、あれよりも背が高いように感じた。とはいえ確証もないので黙り込んでいると、京極堂が「で？」と声をかけてきた。

「そのスカイツリーとやら、寡聞にして初耳なんだが、どこの建物だい？ ニューヨークか？ それとも、シカゴかい？ 今では高層ビルといえ、すっかりニューヨークにお株を奪われてしまったが、そもそも高層ビルの元祖といえ、シカゴだ。世界最初の高層ビル、ホーム・インシュランス・ビルもシカゴだからね」

「い、いや、違うんだ——そうじゃない」

おどおどとした口調で関口は否定した。

「ああ、そうか。ビルじゃない、君は塔と言っていたか。それなら、これから始まるテレ

ビジョン放送用の電波塔というところか。パリのエッフェル塔も、万国博覧会用に造られとり壊しが決まっていたものが、軍事用の電波塔に改修されたことで生き延びたわけだが——ん？」

関口の逡巡を察したのか、京極堂は言葉を呑み込んだ。

「違うんだ、そうじゃないんだよ、京極堂。シカゴでもニューヨークでもないんだ。パリでもない。そのスカイツリーは東京にあるんだ——押上だ」

「押上？」

京極堂は首を捻った。

「墨田のかい？ 確かに押上は戦前から都電の始発駅で、あのあたりではもともと栄えている街だが——見上げるほどの、エンパイア・ステート・ビルディングと並ぶほどの高さの塔とは——」

「見たんだ」

関口は断言した。

「スカイツリーだけじゃない。遠くにもいくつも——いくつも、高いビルが見えていた——」

うなされたような関口の呟きにじっと耳を傾けると、京極堂はおもむろに口を開いた。

「わかったよ、関口君。で、君は押上のスカイツリーというものを、いったい、いつ、見たんだ？」

その京極堂の質問に、関口は震えた。ひどい寒気がしていた。真夏だというのに、全身に氷を押し当てられたような――。

「――いつ見たか――まだ見ていない――これから――これから、見るんだ」

関口がようやく絞り出した回答に、京極堂は「はあ」と息をついた。それは呆れ果てた嘆息のようにも、なにか腑に落ちた安堵の溜息のようにも聞こえた。

「関口君。君という男はまったく――肝心なものは見えなくせに、余計なものに見えるらしいね」

「あっ、ああ」

雑司ヶ谷の事件のことを言われている、そのことはすぐに理解できたが、半分朦朧としていて、なにも言い返せない。

「で、関口君。そのスカイツリーを見上げた君は、いったい、なにをしているんだ？ ただ阿呆のように高い塔に見とれていたのか？」

「――『S』という名前の男を追いかけて――木場の旦那と、幻叡社の桜木さんと一緒に――」

「S」がなんなのか、幻叡社の桜木さん、が誰なのか。それを京極堂は問おうとはしなかった。ただ大きく頷くと、

「しん、だな」
と言った。

「――しん？」

「ああ、しん、だ」

京極堂は積み上がった本の隙間から白い紙を一枚引っ張り出すと、近くにあった筆を走らせた。

――蜃。

「これが、蜃、という文字だ。」

君も蜃気楼という言葉は知っているだろう。遠くに見える幻のことだ。まあ実際は、本物の景色がずれて見えたり、上下逆に見えたりする現象だが」

「あ、ああ」

「蜃気楼自体は、あくまでも自然——氣象現象だ。大気は地面に近いところや上空ではその温度——気温に差が出る。気温に差があれば、大気の密度も変わる。密度が変わった大気を通れば光線は屈折する。そこに幻の景色が生まれる、という仕組みだ。だが、こうした理解が進む以前は、蜃という妖怪の仕業、と思われていた。その名の通り、蜃の気の楼——妖怪・蜃が吐き出す、幻の楼閣というわけさ」

「——知っている」

虫の鳴くような小さな声で関口は答えた。

「そもそも、蜃という妖怪は興味深い存在でね」

関口の返答が耳に入らない様子で、京極堂は続けた。

「蜃の伝承があるのは日本と中国だ。蜃といえば、巨大な蛤として知られている。妖怪画を多く残した浮世絵師の鳥山石燕が『今昔百鬼拾遺』で描いた『蜃気楼』も、妖しい気を吐く大蛤の姿になっている。そもそも『蜃』というのは、中国古代では蛤の別名だったそう。まあ、中国から伝来した妖怪と思って間違いないだろう。ちなみにこれを興味深いと言ったのは、理由があつてね。名前の由来からしてもっともな蛤の姿だけではなく、竜の姿をしていたという説があるんだ」

「蛤と竜——まったく別ものじゃないか」

「だから興味深いんじゃないか。」

——中国に『本草綱目』という書物がある。本草学——中国の薬学に関する大著で、十六世紀に編纂されたものだ。中国だけでなく、日本の薬学にも大きな影響を与えた本で、家康が薬草研究を始めるきっかけになったとも言われている。その『本草綱目』には、蜃とは蛟竜という竜の一種であると記されている。蛤の蜃が気を吐き出すのに対して、こちらの竜の蜃は身体が原料となつて、それが蜃気楼を生み出すとある。この蜃と竜という説は日本の本草書『大和本草』に記載がある。江戸期のいわば百科事典である『和漢三才図会』だと、蛤である蜃と、竜である蜃の二通りの蜃について記されている

「どうして、ふたつの姿が伝わっているんだ？」

「中国の——、周から漢にかけて記された『礼記』という書物がある。その一篇の『月令』という——『月令』というのはいくつか、年中行事や天文、曆について月ごとに記したものを指すんだが——そこに解説がある。蛤の蜃と、竜の蜃が同名であつたために、混同されたのだと」

「じゃあ、蛤の蜃が本物で、竜の蜃は後からそれと混同されたの？」

「その通り。ただ、それだけのことだ。つまらない結論だね」

関口の問いかけに、京極堂は珍しく歯を見せて笑った。

「この世には不思議なことなどないのだよ、関口君」



「でも……本当に、ただそれだけのことなんだろうか？ もっと別の理由があつて……」
関口は珍しく食い下がった。そんな様子を興味深げに見ていた京極堂は、正面から関口に向き直った。

「関口君、君はつまり、蜃の吐いた気にとり込まれてしまったんだろう」

「なにをいきなり」

関口は真面目な顔で抗議した。

「それだよ——僕は——君にわざわざ説明してもらわなくても、『蜃』のことなら、よく知っているんだ」

「ほう」

関口の正面からの反抗に、京極堂は「これは愉快だ」と言わんばかりに相好を崩した。

「僕はつい先日、『蜃の楼』という長編を上梓じょうししたばかりなんだ。そのために、やっかいな事件に巻き込まれてしまったけれど」

「『蜃の楼』？ 長編？ おや、それは初耳だ。いつの間にそんな長編をものにしたんだい。初短編集のことなら聞いていたが」

「——初耳だって？」

関口も怪訝けげんな顔になった。

「これまで、なんだか話して聞かせたと思うが。忘れ——」

言いかけた言葉を呑み込んだ。京極堂がいちど聞いた話を忘れるはずはない。だが、自分分は『蜃の楼』のことなら、なんども話したはずだ——。

「そもそも、その『蜃の楼』というのはどういふ小説なんだ？ 君が書くものだから、明瞭めいりょうな筋立てはないかもしれないが、ものが長編だ。多少の骨、らしいものはあるだろう？」

「——っ」

京極堂の問いかけに、関口はなぜか息を呑んだ。

「『蜃の楼』の筋立て——それは——」

——なんだろういったい。

書き上げてまだその日数が経っていないというのに——どうしてか、ぱっと思い出せない。脳の中に手をつ突っ込むようにして、無理やり記憶を探る。

「——池袋だ。」

池袋で——。

囚われていた男が——。

救いを求めて——」

——記憶を辿れたのはそこまだった。

途方に暮れ、関口は黙り込んだ。京極堂もまた、無言で関口の顔を見ていた。両者の睨み合いが永遠に続くかと思われたが——。

「関口君。いや、そもそも君は——」

沈黙を破ったのは京極堂だった。だが、関口は突然、立ち上がった。

「——どこへ行くんだね、関口君」

「——そんなこと決まってるじゃないか——『S』を追いかけないと——約束しているんだ」

背中を向け、関口は中禅寺家の座敷を後にした。

——そんな彼を、京極堂はただ黙って見送り、引き止めようとはしなかった。

続きは、5月15日発売の富士見し文庫で！